メインシナリオ／サイド第５回
『炎の慟哭　第１話』個別リアクション

『犠牲にする覚悟』

　警備隊員と立候補者が詰所から出て行った後、ウィリアムとピア・グレイアムは、バート・カスタルと共に馬車に乗り、領主の館へと向かうこととなった。
　既に深部に向かう事が決まっている者――火の特殊能力者たちを交えての相談を行う為だ。
「深部に向かう人たちだけの相談ですよね。私も伺っても良いのでしょうか？」
「そうなんだが、君には話しておいた方が良いと思ってな。まずは、火山と、特殊能力を持つ一族のことなんだが」
　バートはウィリアムに目を向け、彼の頷きを確認してから話しだす。

　かつて、この地に強い炎の魔力を操る一族が暮らしていた。
　一族の中には、常に体に龍のような蛇のような痣を持つ女性が１人存在していた。
　その女性が二十歳になる頃に、一族が護る山に異変が起き、その異変を鎮めるために、痣を持つ女性はその体を山に捧げていた。
　１００年ほど前、痣を持っていた女性は、ウォテュラ王国から訪れた者に、王国へと連れ去られてしまった。
　異変を鎮める手段を失った一族は、命を賭したが火山は大噴火し、この辺り一帯は滅んでしまった。
　唯一生き延びたのは、これから会う、アーリー・オサードという女性の曽祖父だけであった。
　そして、連れ去られた痣を持つ女性の子孫が、領主の館の管理人であるインダー家だということ。

「火山に体を捧げると、火山の活動が鎮まるのですか？」
「そうらしい」
　つまりこの作戦は、水の神殿の力で皆を守り続けるために、１つの身体を犠牲にする作成なのだと、ピアに告げられた。

　しばらくして、馬車は領主の館に到着した。
　そのまま敷地内の外れにある、堅牢な造りの館へと馬車は向かい、３人を降ろした。
　館の２階の、教室のような部屋の中で、特殊能力者の２人が自分達を待っていた。
　レイザ・インダーと、大人しそうな女性。
「なんであなたが騎士団と一緒に来るのよ」
　女性――アーリーの表情ががらりと変わる。彼女は冷ややかな目をウィリアムに向けていた。
　構わず、ウィリアムは微笑して彼女の側へと向かった。
「火山の深部同行者に立候補し、正式に同行を認められた」
「何考えてるのよ……」
　ウィリアムは小声で、彼女に言う。
「もし俺が行かずに生き残ってもだ、行かなければ絶対に後悔する。それにだ、あれだけ言っといて、行かないっつのも格好悪いだろ？
　一人ぐらいは、お前の為に命をかけさせろ」
「役に立たないわ。足手まといになるだけ」
　抗議の目をアーリーはバートに向けた。
「彼には魔力を増幅する薬を飲んでもらう予定だ。大丈夫、きっと君の役に立つはずだ」
「属性は？」
「検査の結果『火』であることが判明している」
　レイザの問いにバートが答えた。
「それなら役に立つだろ。俺達の特殊能力は、火の属性の者を通す事が出来る……と、教えてくれたのはお前だ」
　レイザがそう言うと、アーリーが顔を背ける。
　そういえば、レイザから炎の攻撃を受けた時、アーリーが直接触れたのはウィリアムだけだったが、ウィリアムに肩を貸し、腕を掴んでいた娘も火傷を負うようなことはなかった。
「その娘は？」
　レイザがバートの隣に立つピアに目を向けた。
「港町でパン屋を営んでいる家の娘だ。地の特異な魔力を持っている。ただ、体力は標準未満だ。火口の中までは連れて行かないが、彼女は覚悟を持っているから、作戦の詳細を知っておいてもらいたいと思った」
「ピア・グレイアムです。出発までの間に然るべき訓練を積み、全力でサポートしたいと思っています。よろしくお願いいたします」
　ピアが頭を下げると、レイザもよろしくと言い手を差し出した。
　握手を交わしたあと、ピアは心配そうにアーリーを見た。
「道中、火山についてお聞きいたしました。“痣”を持つ方は……」

「彼女ではない」
　と、直ぐにレイザが答えた。
「他言無用だが、体に痣があるのは、俺だ」
「痣を持って生まれるのは、女性だけじゃないのか？」
　ウィリアムが怪訝そうに尋ねた。
「そのはずなんだが、双子の姉と同じ痣が、俺の身体にもあった」
　姉は生まれてすぐに両親と共にウォテュラ王国に向かい、死んだと聞かされており、少なくてもこの空間に火属性の痣のある者は自分以外存在しないと、レイザは話した。
「この作戦の目的は、痣のあるこの身体を確実に、マグマの中に運ぶことにある。
　かつては、痣のある人物をマグマの中に連れて行くために、少なくても１人一族の者が一緒に犠牲になっていたとのことだ。
　また、痣のある赤子を犠牲にしたこともあったようだ。つまり、痣のあるその肉体と、体に宿る魔力、生命エネルギー、そういったものが必要なのだろう」
　淡々とレイザが語り、皆は真剣な面持ちで彼の話を聞く。
「チャンスは１度しかなく、失敗は決して許されない。より確実な方法をとる。
　迷いは不要だ。俺を連れていき、バートの命が尽きないうちに、お前達は洞窟へと戻り、皆のところに帰還するんだ」
　レイザはウィリアムとアーリーを見て、そう言った。
「何その方法」
　くすっと、アーリーが嘲るような笑みを浮かべた。
「私、死ぬわよ。あなたと心中なんて不本意だけれど、水の中で死ぬより、マグマの中で祖先と一緒になった方がマシ。
　人間なんて大嫌い、生きたくないのよ」
「それでも、生きてもらわなければ困る。この血を絶やすわけにはいかないからな。
　命は賭してもらう。それでも生き残った場合は、覚悟して生きろ」
　レイザは厳しい目で言い、アーリーが反論する前にウィリアムが疑問を口にする。
「それは分かったが、どうやってたどり着くんだ。昔のように上から飛び込むんなら、マグマの中に到着するまでさして時間はかからないが、洞窟から行くとなると、長時間のガス対策が必要だよな。水中で呼吸できそうな奴で対応できないか。魔法具の貸し出しは？」
「水中で呼吸を出来る道具というものが存在していたかどうかはわからないが、ここにはない。
　水の結界の中に空気が存在しているように、魔法のバリヤーでガスを遮断するしかないだろう。魔法具は存在しているものなら、借りることが出来るが今からの開発では間に合わないだろうな」
　答えたのはバートだった。
「土木作業や回復系の魔法具くらいは存在してるだろ？　そういった魔法具を要所で使えば、負担減らないか？」
「確かに。どんな魔法具が必要か、他の者も交えて話し合っていこう」
「魔法具の取り扱いについては、俺が教える。ここにいる者だけではなく、道中同行する者にも必要ならば」
　レイザが言い、バートが頷いた。
　その後、各々の能力について確認しあい、この日は解散となった。

こちらのリアクションは以下のＰＣに発行されています。
ウィリアム
ピア・グレイアム